

2020年9月6日  
聖霊降臨後第14主日  
東京聖三一教会

エゼキエル 33:7-11  
ローマ 12:9-21  
マタイ 18:15-20

あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる

司祭 シモン 林 永寅

今日の聖書日課のテーマは和解とも言えるでしょう。それで今日は和解についてお話したいと思います。

人々は和解というと、人々の間での和解のことだけを考えます。けれども、教会で言うところの和解とは、人々の間の和解にとどまらず、神様との和解をも含む広い意味合いがあります。それは、人々との間の和解も神様との和解につながるからです。

創世記では和解を非常に重要なテーマとして扱っています。特に族長の物語は、そのすべての内容が和解の物語であると言っても過言ではありません。そしてヨセフとその兄弟たちの物語は和解によって創世記の大団円を飾ります。

まず、ヨセフとその兄弟たちの物語を見てみましょう。ヨセフの兄たちは、ヨセフを憎んでミディアン人の商人に売り渡しました。そしてヨセフはエジプトまで行くことになりました。しかしエジプトで総理大臣になるのです。酷い飢饉によってエジプトに避難したヨセフの兄弟たちはヨセフと和解をしました。けれども安心できませんでした。それは、ヨセフの兄弟が穀物を買うためにエジプトに行った時、ヨセフが彼らを「回し者」だとして牢獄に監禁し、穀物の袋に銀の盃を入れて困らせたことを覚えていたからです。お父さんのヤコブが死んでしまったので、兄たちはさらに恐れていました。それで兄たちは、「咎と罪を赦してやってほしい」という父の遺言を伝えながら、ヨセフに赦しを請いました。涙を流している兄たちを見て、ヨセフも共に泣きながらこのように言いました。

「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れなくてください。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう。」  
(創世 50:20-21)

ヨセフとその兄たちはその日、真の和解をすることができました。

しかし、仕方なく和解した例もあります。それはヤコブとエサウとの和解です。ヤコブは、レンズ豆の煮物で、エサウの長者の権利を奪いました。そして、父までだまして、エサウが受けるべき祝福を横取りしました。腹が立ったエサウがヤコブを殺そうとすると、ヤコブは叔父のラバンのところに逃げました。そしてそこで一家を成して暮らしました。けれども欲張りであるヤコブがラバンの家族と仲良く過ごすことができるわけがありませんでした。葛藤が生じ、ヤコブはそこを離れることを余儀なくされました。ヤコブにとっては行き場がありませんでした。見慣れないところに行けば異邦人たちに殺されてしまいます。どうすればいいか。もしエサウと和解さえできれば、故郷の地どこかで生きながらえることができるかもしれません。それでヤコブはエサウに多くの贈り物を送りながら和解を試みました。この和解の場面のなかでエサウは涙を流しますが、ヤコブは涙を流しません(創世 33:4)。その後、この二人は父のイサクが死んだ時も、葬儀のために会うだけで(創世 35:29)、二人の間にいかなる交りもありませんでした。これは、和解がそれほど難しいということを示しています。

わたし自身もやはり今まで和解できなかつたことがいろいろありました。わたしの父を騙して全財産を横取りした親戚もいました。あの時、わたしの家族が経済的にどれほど苦しい状況に置かれていたのか、わたしはあやうく中

学校に入れなかつたかもしれません。そして労働運動をしていた時、過酷な裏切りも経験しました。わたしの先輩はその裏切りに絶望して自殺をし、後輩は手首を切られて一生障害者として生きています。わたしを拷問した情報機関員も赦し難かつたのです。当時、わたしはよく夢を見ました。夢ではいつも情報機関員に追いかけて行き止まりに追い込まれてしまいました。その時、わたしは刃物を取り出して情報機関員の胸を刺しました。血が吹き出しました。その血に驚いて目覚めると夢でした。

神学生の時、今日と一緒に読んだローマ書の「自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」(ローマ 12:19)という一節は、わたしにとって十字架になりました。わたしは、わたしの胸の中にあつた怒りを解決できない限り、まともな司祭にはなれないと思ひました。それで、彼らを赦すことができるようにと神様にすがるように祈りました。けれども赦しと和解は簡単にはできませんでした。韓国の社会が民主化すると、彼らを赦して和解できるような気持ちになりました。けれども、図々しくも、独裁を擁護する彼らの姿を見た時には血がさかのぼってくるような気がしました。その後、年月が経ち、心は少し穏やかになつたものの、依然として赦しと真の和解は課題として残っています。

ところで、このようなわたしの事情を知らない信徒たちが、わたしに和解の方法を尋ねました。困りました。わたし自身和解をちゃんとできないくせに、良い方法を知っているわけがないでしょう。その時わたしは、今日と一緒に読んだローマ書の「悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい」というみ言葉を伝えましたが、はずかしかつたのです。このようなパウロの勧めは越えられない高い壁のようにも感じられることもあります。一体どうすればいいのでしょうか。今日と一緒に読んだ福音書には、イエス様の和解のための具体的な方法が記されています。それと一緒に見てみましょう。

イエス様は、和解のためにまず、当事者が会うことをお勧めになりました。このように直接に会うためには勇気が必要です。ですからこの方法も難しいのです。けれどもイエス様のお勧めであるから従つてみる必要があります。直接に会つて忌憚なく話をするのはお互いの理解のためにも良い機会になるでしょう。イエス様は、和解ができれば兄弟を得たことになる、とおっしゃいました。和解はお互いを以前の関係よりさらに深める場合が多いのです。

しかし現実はこのように直接に会つて話をしたからといってすべての問題が解決できるわけではありません。もしかしたら相手が非難しながら対応してくるかもしれません。イエス様はその時は、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい、とおっしゃいました。このようにするのは律法によることでもあります。ほかの一人か二人が二人の間の障害物を取り除くこともできるからです。けれども、このようにやっても解決できない場合があります。イエス様は、この時には教会に申し出なさい、とおっしゃいました。これは、公開的で客観的に問題を解いていく過程です。

最後にイエス様は、このような努力をしたにもかかわらず問題が解決できなければ、「その人を異邦人か徴税人と同様にみなさい」とおっしゃいました。あきらめなさいという意味でしょう。イエス様は普段、「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」とおっしゃっていました。それにもかかわらず、このようにおっしゃつたのは、人間の限界をお考えになつたのか、悪から教会を守るためかもしれません。とにかく私たちにとっては安心できる面もあります。けれどもイエス様は問題解決のために何よりも祈りを強調なさつたことを忘れてはなりません。

人々は、和解を正しいことと悪いことをはっきりさせ、人々の間にこじれている関係を解くためのものだと考えています。けれども和解はそれを超えるものです。和解の真の目的は、過ちを犯した人や罪を犯した人も救われるようにするためです。わたしたちはそれを、と一緒に読んだエゼキエル書からも分かります。エゼキエル書にはこのように記されています。

「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰つて生きることを喜ぶ。」(エゼキエル 33:11)

イエス様が、「あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐがれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる」(マタイ 18:18)とおっしゃったみ言葉も同じです。このみ言葉は共同体の権限と役割について示すみ言葉でもあります。一方では、「解くのがいいか、それとも、解かないままにしておくのがいいか」という問いでもあるのです。果たしてどうするのがいいのでしょうか。答えはわたしたちの胸の中にあるでしょう。

和解は難しいのです。それで、信徒さんの中には和解ができなかったといって自責したり、深い罪の意識を持っている方がいらっしゃると思います。自責の念とか罪意識があるのはそれほど信仰的に健康であるという意味です。また罪意識によって苦しんでいるのなら、共に覚えておくべきこともあります。それは、神様のうちに祈りながら生きていけば、神様はいつか和解ができる力を与えてくださるということです。そして神様はいつも私たちの成熟のために共にしてくださり、恵みをもって祝福してくださいます。ですから、その日のために祈りながら生きていきましょう。

この一週、祈りを通して和解のための勇気と力を得て、和解を通して新しい喜びと恵みが得られますように心からお祈りいたします。